



教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1987
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

ヨハネ・パウロ二世 教皇様の声

年間購読者募集中
(1月~12月)

日曜日ごとの「お告げの祈り」の時や水曜日ごとの一輪徳見の時を始め教皇さまは、あらゆる機会をとらえて教えを伝えておられます。本紙は、ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのままわかり易い日本語に訳して伝える月刊紙です。

年間購読申込要領

■教会でまとめて、お申込みの場合
教会で2部以上まとめてお申込みになると送料が無料になります。年間購読料は800円です。教会名・ご担当者名・部数を明記の上、お申込ください。

■個人で直接お申込みの場合
1,300円(年間購読料800円+送料500円)を郵便振替にてお送り下さい。

見本紙は40円切手同封の上、ご購入ください。

財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 ☎0797-31-3452

〈徹夜祭〉 みことばは 人となられた

★「おそれることはない。すべての人々のための大きなよろこびの知らせを私はあなたたちに告げよう。今日、ダヴィドの町であなたのために救い主がお生まれになった。すなわち、主キリストである。」(ルカ2・10~11)

クリスマス・イブを迎えた私たちは何世紀も経た今夜ふたびこの言葉聞きにここに集まりました。この言葉を最初に聞いたのはベトレヘムの野原にいた羊飼いたちでした。ある国で、今夜の典礼を「羊飼いたちのミサ」と呼ぶのは、この事実に由来します。

この典礼に参加するのは、ここ聖ペトロ大聖堂に集う私たちがかりでなく、おびただしい数の兄弟姉妹もラジオやテレビを通じて荘厳な儀式に与っています。ベトレヘムでの夜の出来事は私たちを一つにしてくれます。

今から、地上の時間の推移につれて地球上のあらゆる所でこの出来事を祝います。

国によってこの聖なる夜を迎える季節も気候も様々です。熱帯の暑さの中にも、北欧の厳寒にも、吹雪の中にも聖なる夜は訪れます。

どんなに異なる状況においても、この夜に同じ出来事が起こります。また、ベトレヘムのあの夜の知らせが、地球上の様々な異なった言語をもつ人々の耳に告げられても、皆が同じ「大きな喜び」の知らせを耳にするのです。

★あの出来事の最初の証人となったベトレヘムの羊飼いはイスラエルの子らで、イスラエルの歴史は救い主の約束に結ばれたものでした。それゆえ、彼らが聞いた知らせは驚嘆すべきものであったのです。しかし、同時に、彼らの理解を越える言葉でもありませんでした。羊飼いの

たちは(メシア)という言葉がどういうことを意味するか知っていません。イスラエルは何世代も前から、主に注油された御者を待ち望んで生きてきました。

(メシア)が(ダヴィドの町)でこの世にお生まれになったのは、預言者がそのように伝えていたからです。ベトレヘムはダヴィドの町でした。その上、(メシア)は(ダヴィドの家系)から生まれるはずでありました。

★ヨセフと今やお生まれにならんとする嬰兒の御母マリアも、ダヴィドの家系に属しその血統でしたから、両親はローマ帝国の人口調査の詔勅に従い、住んでいたナザレトからベトレヘムに行くことになったのです。

このようなわけで、羊飼いたちは聞いた言葉の意味がよくわかりました。イスラエルになされた約束が成就したのです。「布に包まれて、まぐさ桶にねかされている嬰兒を見るだろうが、それがしるしである」という天使の言葉に羊飼いたちは驚いたに違いありません。羊飼いたちは聞いた言葉が神からのものであることを疑いませんでした。

★世界中のあらゆるところで私たちは礼拝のために集まっています。

彼らは信仰に(照らされた目)のみ受け入れられるあの出来事を目撃者でした。

す。それは、あの聖なる夜、ベトレヘムの羊飼いたちが最初の列席者となったあの救いの出来事を、今、聖体祭儀を通して更新し、再現するためです。間もなく、ニケア・コンスタンティノープル信経のよく知られた言葉が響く時、私たちはみな跪きます。

「神よりの神、光よりの光……父と一体なり……聖霊によりて処女マリアより生まれ、人となり給えり。」



クリスマスおめでとうございます。

★ 神が御自分の永遠の御子において「人となり給う」秘義、御託身の秘義。

この言語に絶する事実への信仰を表わして跪き、ひれ伏すのです。

全世界の人々と全ての被造物の名において跪きましよう。

ベトレヘムの夜の出来事によって、世界と人間の創造の最終的で完全な意味が私たちの信仰の目に明らかになるのです。

★ もうすぐ、みなさん一人ひとりの前に司祭が助祭が御聖体を持って行き(キリストの体)と言います。

みなさんは(アーメン)と答えませんが、それは主を受け入れ、礼拝し感謝する信仰を表明することです。そして、ベトレヘムの夜の出来事を目撃した羊飼いたちに一致します。人となり給うたみことば、神が人間と結ばれた新しい永遠の契約の御体と御血。

ベトレヘムの夜の出来事はこの世の人間の心と歴史に深く入り込む、新しい一致の始まりです。

(天には神に栄光、地には主を愛する人々に平和。)

★ 「天は喜び、地はおどり、海とそれに満ちるものとは鳴りわたる、野とそれに満ちるものは喜びいさみ、森の木々は声を上げんことを、主のみにあって。主は来られる。」(詩篇95・11〜13)

全ての被造物、ベトレヘムのこの聖なる夜を過ごす全ての人、全世界に散らばった兄弟姉妹を、主が喜びと平和で満たしてくださいませよう。アーメン。

恩寵と救いの戦い

🕊️ 「主イエズス・キリストの父である神を称えよう。」(エフエゾ1・3)

待降節の典礼中、この賛美の言葉が響き渡ります。

この賛美の祈りを唱えながら、私たちローマの教会は、スペイン広場を目指して巡礼を始めました。そこで、無原罪の聖母は、輝かしい柱の頂から、ローマの町を見渡しておられます。次いで私たちは、(聖マリアは神の母である)という教会の信仰が固められたところ、すなわち長い歴史を誇るこの(雪の聖母大聖堂)にやって参りました。

エフエゾ公会議の神父たちが喜びにあふれて(テオトコス)(ギリシャ語で神の母という意味)と宣言し、それに呼応して同じく(神の御母)と叫んだローマの教会がこのすばらしい大聖堂を建立したのである。

🕊️ 「主イエズス・キリストの父である神を称えよう。」 私たちがここに集うのは、神を称えるため、待降節の秘義を通して神を礼拝するためであります。待降節とは、世の創造以前から永遠の御子において私たちが選ばれた神、その神のうちに隠された秘義のうち第一のものです。(エフエゾ1・4、コロサイ1・26参照) また神は、イエズス・キリストを通して、私たちが御自分の養子

にしようと予定されました。(エフエゾ1・5参照) 救いに関する永遠の神の意志決定でありました。御父は自らと同じ本性を有する御子を永遠より愛し、その御子において私

たちを愛してくださいさるのです。愛する御子を通して(エフエゾ1・6参照) 私たちに愛を注いでくださいます。というわけで神は、自らに似せて人間をお造りになっただけでなく、

遙かにそれ以上をしてくださったことがわかります。神の生命に与ることができるようになってくださったのです。こうして、無限の尊厳が実現する三位一体の神的生命が、私たちに与えられる賜となりました。永遠にお愛しになる御子において、御父がこの恩寵という賜を私たちにお恵みになったのです。

🕊️ 神を称えよう、私たちが待降節の秘義を通して神を賛美するため、本日、ここ大聖堂に集まりました。

永遠から「私たちのために」存在することを望まれた御者がここに召られます。自らを



現わし、私たちのもとに来ることを望まれた御者が……。

🕊️ 待降節は人類史の一段階です。この歴史は、ある意味で、神がアダムに「どこにいるのか(創世の書3・9参照)とお尋ねになった時に始まったと言えます。そのときアダムは隠れていました。罪を犯したから隠れなければならなかったのです。その御前ではいかなるものも隠れることができず、全ては明らかに表われるその御方から身を隠そうとしたのでした。

神の御目には人間の最初の罪と人類の歴史における罪の結果は明らかでありました。ただし、永遠の「恩寵の光栄」(エフエゾ1・6参照)を曇らせることにはならなかったのです。以上は、待降節が人類史における恩寵と罪の戦いであることを示しています。私たちが一人ひとりがこの戦いの場なのです。つまり、救済史は罪の歴史を通して実現されるという

ことです。

🕊️ 以後、待降節はまさにこの歴史の段階のなかで贖い主の来臨を示すこととなります。キリストは、罪をその根元から「踏み砕き」、「死に至るまで、十字架の死に至るまで」(フィリッピ1・8参照)従順を果たし、その結果、恩寵の勝利を得てくださいます。女性から生まれる贖い主、マリアの子であります!

🕊️ 本日私たちは、(女性)の秘義を思い、神を称えるため、この大聖堂を訪れています。主は、はじめから、贖いの約束をこの女性に結びつけて考えておられました。私たちが聖母マリアとその無原罪の御宿りに感謝するためここに集っています。

第二ヴァティカン公会議が述べるように、聖母マリアは、御子の功績を前もって考慮され、崇高な方法で贖われ、緊密で解くことのできない絆によって御子に結ばれた御方です。(教会憲章) 53)

🕊️ 聖母マリアは待降節の中心においてになります。「愛する御子」において神が私たちのもとにおいてになるという出来事を中心をなすのがマリアです。

🕊️ ここで神の永遠の御計画を伝える(使者)が聖母を訪れ、思いがけない言葉で挨拶します。「めでたし(ギリシャ語でケハルトメネ)、聖寵に満ちた御方。主はあなたとともにいかにあります」と。(ルカ1・28)

🕊️ 御身において創世記の(女)の秘義が実現するでしょう。「あなたは身をもって男の子を生むであろう。その子をイエズスと名づけなさい。」

説教・講話・書簡等の抄訳

(イエズスとは、神救い給うという意味)(ルカ1・31)
 このようにして永遠の「恩寵の光」は人間に近づいてきました。人間の心まで下ってきたのです。
 人祖の罪を契機に人間から離れた神が今ふたたび近づいて来てくださるのです。それも限りなく近づき、ナザレトの処女(まご)の心なかで人となられました。エンマヌエル(神が共

イエズス・キリスト—— 預言の成就

キリストシリウス⑧

メシアについての真理が旧約においてすでに預言されていたこと、そしてそれが、神の啓示の新しい段階へと移ったナザレトのイエズスの時代の人々に継承されていったことなど、とても重要な点を前回から述べてきました。イエズスに従った当時の人々が真理を受け入れたのは、イエズスのうちにメシアの真理が実現し、イエズスこそ真のメシア・キリストであることを認めただけからでした。イエズスに召された最初の弟子アンドレアは、「メシア——キリストの意味——に会った」(ヨハネ1・42)と兄弟シモンに告げました。これは実に意味深い言葉です。
 しかし福音書においてこれほどはつきりと表現されているのはむしろめずらしいことです。「イエズスが行なわれ、また教えられた」(使徒行録1・1)どのようなことにも、人々

にいます)、神であると同時に人となつてくださったのです。
 主イエズス・キリストの父である神を称えよう！
 私たちは聖母のかたわらで贖い主を待ち望むことにします。御子の御母、聖母は、最初に贖われた御方です。これが無原罪の意味です。教会の典礼では、待降節中に聖母の無原罪を祝います。

贖い主の誕生を聖母と共に待つ私たち教会は、救い主の恩寵という面から考えても、聖母が私たちの御母であることを知っています。そこで期待に胸をふくらませ待降節をお過ごしになった聖母を思いつつ、聖母のあとのときの期待に心を合わせ、主を待ち望んでいるのです。
 (教会の時)と称される期間に

節を待つ間、マリアは救いの歴史にふくまれる人類史のなかで輝き続ける御方です。
 「罪が増したところには、それ以上に恩寵があふれるばかりのものとなった」(ローマ5・20)
 贖い主の御母、無原罪の聖母のもとに、「キリストに希望をおく」全ての人が集います。(エフェソ1・12参照)

聖なる使徒や殉教者の足跡に見られるように、「このローマで聖母は(人々の救い)(ローマの救い)」として私と共に居てくださいませ。聖母のかたわらに集う私たちは全員キリストに希望をおき、栄光のうちに来臨される主を待ち望んでいるのです。(テイト2・13参照) アーメン。
 (無原罪の御宿りの祝日に。サンタマリア・マジョーレ大聖堂にて。)

は驚きと感嘆を示していました。しかし当時のユダヤ社会に広がっていた救い主のイメージは、イエズスのお姿とお働きにはそぐわないものでしたから、イエズスは同一視されるのを避けられたのです。
 イエズスこそ世の罪を取り除く(神の子羊)であることを認め、ヨルダン川のほとりでイエズスをさして「来たるべき御方」(ヨハネ1・15参照)と言った洗礼者ヨハネ、そしてその御方こそ聖霊の御方で「新しい洗礼」を授けられる御方であることを宣言した洗礼者ヨハネが弟子を送って「来たるべきお方はあなたですか、それとも他の人を持たねばなりませんか」(マテオ11・3)と尋ねさせたことを思い出します。
 イエズスはヨハネの使いに次のようにお答えになりました。「あなたの見聞きしたことをヨハネに知

らせに行け。盲人は見え、足なえは歩き、らい病人は治り、耳の聞こえぬ者は聞こえ、死人はよみがえり、貧しい人には福音が告げられている」(ルカ7・22) このようにイザヤの書(イザヤ35・4-5、61・1参照)を引用し、救い主としての使命を知らせようとなさいました。そして「私につまりかぬ者は幸いです」(ルカ7・23)と最後に仰せられました。このお言葉は、尊い先駆者、洗礼者ヨハネに直接向けられているようです。洗礼者ヨハネはメシアについて異なった考えをもっていました。事実、ヨハネはその教えの中でメシアの姿を厳しい裁判官の姿として伝えていました。「近く来るお怒り」とか「良い実をつけぬ木」(ルカ3・9)をすべて切りたおすために「木の根におかれたおの」(ルカ3・7、9)というような表現を用いて話をしていました。たしかにイエズスは、必要な時にははっきりと、また厳しく神の御言葉に対する逆らいやがんこな態度に触れられることもありました。が、むしろ貧しい者に福音を告げる御方であり、御働きと奇跡によって慈悲深い父なる神の救いの

聖旨を明かす御方だったので。
 イエズスのヨハネに対するお答えには、もう一つの注目すべき要素が含まれています。つまりイエズス御自身が救い主であることを公に宣言することををはかられたということ。当時の社会的状況のもとでは、メシアという呼び名はともあまいで、人々はそれを政治的にとらえていました。ですからイエズスは説いて無理に信仰を引き起こすよりも、御働きによって証明する方を望まれたのです。
 しかしながら、ヨハネの福音書に記されているサマリアの婦人との会話のような特別の場合もありました。「私はキリストと言われますメシアがおいでになることを知っています。その方が来ればすべてのことを知らせてくださるでしょう」と言った婦人に、イエズスは「あなたに話している私がそうだ」(ヨハネ4・25、26)とお答えになりました。
 会話の内容によって聞く用意ができていないと判断されたイエズスは、サマリアの婦人にははっきりと確信をお与えになったのです。イエズスの御言葉を聞いて婦人は町に戻り、急

いで人々に知らせます。「私がしたこと全部話した人がいます。見に行らっしゃい。あの人はメシアではないでしようか」(ヨハネ4・28、29) 婦人の言葉に動かされて、多くのサマリア人がイエズスに会いに来ました。そしてイエズスの話を聞き、「ほんとうに彼こそこの世の救い主だ」(ヨハネ4・42)と確信したので。
 しかし、イエズスの御言葉と奇跡を見聞きしたエルサレムの住人たちの中には、救い主かどうか、疑問をもつ人々がいきました。「私たちがこの人がどこから来たかを知っている。キリストが来る時はどこから来るかを知らないのだが」(ヨハネ7・27)と言ってイエズスが救い主であることを認めようとしないうもいましたが、「キリストが来られても、この人がしたほどの奇跡をされるだろうか」(マテオ12・23)と言う者もいました。ユダヤの議会は「もしイエズスをメシアだと宣言する者があれば、会堂から追放する」(ヨハネ9・22)と決めていたのです。
 こうして私たちは、フィリッポのカイザリアへ行かれる途中、弟子たちに話されたイエズスの御言

不変の教え

葉の真の意味が理解できます。「イエズスは弟子たちに『みなは私のことを何者だと言っているか』と尋ねられたので『洗礼者ヨハネあるいはエリア、あるいは預言者の一人だと言っています』と弟子たちは答えた。するとまた『ところであなたたちは何者だと思ふか』と問われると、ペトロが『あなたはキリストです』と答えた。(マルコ8・27〜29、マテオ16・13〜16、ルカ9・18〜21) つまり、メシアです、と。

マテオの福音によれば、イエズスはこの答えをお聞きになって後、ペトロが教会のかしらになることを宣言しました。(マテオ16・18参照) そしてペトロの答えのあとで、イエズスは『私のことをだれにも言うな』(マルコ8・30)と戒められました。御自分が救い主であることを宣言なさらなかったばかりか、弟子たちにもイエズスが誰であるかを公にすることを望みにならなかつたのです。イエズスの御働きを見て、そして教えを聞いて人々が信じるようになることをお望みでした。「あなたにはキリストです」とペトロが皆の名のもとで表明したことを弟子たちも皆確信したのですが、それは、イエズスの御働きと御言葉が大きな基礎となり、その土台の上に救い主であるイエズスに対する信仰が築かれていたからでした。

師のお叱り

マルコとマテオ両福音書に並行してあらわれる、この会話の意味深い展開を追っていくと、救い主

としてのイエズスの聖心に気づきます。(マルコ8・31〜33、マテオ15・21〜23参照) あたかも弟子たちが信仰告白したことと関連させるかのように、イエズスは「人の子が多く苦しみを受け、長老や司祭長や律法士らに見捨てられ、ついに殺され、三日後によみがえることを弟子たちに教え始められた。(マルコ8・31)」「イエズスははっきりとそれを話された。(マルコ8・32) すると『ペトロはイエズスの袖を引いて諫め始めた。(マルコ8・32)』そして言った。「主よ、そんなことは起こりませんように。(マテオ16・22)」と。これをお聞きになったイエズスは、『ペトロに向かつて言われた。『サタ

忍耐と慈悲に富むイエズスの聖心！ 今日お告げの祈りの機会に、聖母と共に、ふたたび福音書を読み返したいと思ひます。ある意味で、全内容を直接に読むことになりません。そこには、はかり知れない慈悲と忍耐にあふれるイエズスの聖心が見出されます。すべての人々に「善を行ないつつ歩まれた」(使徒行録10・38参照) 御方の聖心は、その忍耐と慈悲にあふれた心ではなかつたでしょうか。盲人の目を開き、歩めぬ人を歩けるようにし、死者をよみがえらせた御方の聖心はそのような心ではなかつたでしょうか。貧しい人には福音が告げられたのではなかつたでしょうか。(ルカ7・22参照)

忍耐と慈悲のイエズスの聖心

狐には穴があり空の鳥には巢があるのに、御自分のためには枕するところも持たれなかつたイエズスの聖心はそのような心ではなかつたでしょうか。(マテオ8・20参照) 罪の女を石殺しから守り、「行け、これからはもう罪を犯さないように」とおっしゃった(ヨハネ8・3〜10参照) イエズスの聖心は、忍耐と慈悲にあふれた心ではなかつたでしょうか。福音書に

ン引きさがれ！ あなたが思っているのは神の考えではなく人間の考えだ。(マルコ8・33、マテオ16・23) イエズスのこの叱責をきくと、救い主としての御働きの始めに荒れ野でお受けになった誘惑が聞こえてくるようです。(ルカ4・1〜13参照) その時サタンは、イエズスが御父の聖旨を実現なさることを思いとどまらせようとしたのです。弟子たち、なかでもペトロは、「あなたはキリストです」と、イエズスの救い主としての使命に対して信仰告白をしたにもかかわらず、救い主がこれから後、苦しみと死をお受けになることを認めることができず、人間的で現世的な救い主についての考え

を捨てることもできなかったのです。御昇天の時にも彼らは「あなたがイスラエルのために国を再興されるのはこのころですか」と尋ねました。(使徒行録1・6) このような姿勢を御覧になったとき、イエズスははっきりと厳しい態度を示されました。イエズスは救い主の使命がイザヤの書に記されている苦しむ主のしもべの使命であること、それは特に次の引用箇所にあらわれていることをご存じでした。「彼は、その御前でひこばえのように、荒れ地から出た根のように成長した。彼には……美しさも姿形もない。彼は、人から軽蔑され、捨てられた、苦しみの人、苦しみにな

れた人。その前では顔を覆いたくなく、そんな人のように、見下され、無視された人。実に、彼は私たちの労苦を背負い、私たちの苦しみを担った、……彼は、私たちの罪のために突き刺され、悪のために押しつぶされた。(イザヤ53・2〜5) イエズスはメシアについての真理を守り、かつ最後まで果たす覚悟をしておられました。それこそ神の聖旨であつたからです。「正しいしもべは、……多くの人を義とする。(イザヤ53・11) このようにイエズスは御自分と友をその出来事に向けて準備されました。「救いの秘義」の完全なる実現、つまり死と復活という過ぎ越しへと準備されたのです。

あらわれる主の聖心について読み返してみましよう。それ以上に、特に、十字架につけられたときの聖心を再読しましょう。槍でつらぬかれ、主について書かれた秘義が全てあらわされたときの聖心！ 人間の全ての苦しみに開かれているゆえに苦しまれる聖心。人間の尺度では測りえない苦しみを御自分のために喜んで受け入れられるゆえに苦しまれる聖心。非常に慈悲深いゆえに苦しまれる聖心。実際、慈悲とはこのように測り知れない愛の尺度、つまり苦しみのうちにあられるものではないでしょうか。慈悲とは、このような愛の決定的とも言える尺度のことではないでしょうか。悪のただなかに迄入り込み、

善をもって悪を制する。これこそ慈悲と言ふべきでないのでしょうか。苦しみに死によって世の罪をあがなう愛、これこそ慈悲ではないでしょうか。 3 忍耐と慈悲にみちたイエズスの聖心！ 主が十字架につけられていたとき、十字架の足下でその聖心をごらんになった聖母！ 聖心の御旨によって私たちの母とされた聖母！ ベトレヘムで、ナザレトで、カルワリオで、御身以上にイエズスの聖心の秘義を知り得た人がいたでしょうか。 聖心の忍耐と慈悲を御身ほどに知ることのできた人がいたでしょうか。 イエズスの聖心について御身ほどに証しを続ける人がいるでしょうか。(一九八六・七・二十七)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円 一年予約八〇〇円送料五〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要 郵便振替 神戸 3-72393